

黄表紙の研究

—山東京伝の作品を中心に

国際文化研究科 国際文化専攻
国際文化研究分野 博士前期課程
2024年3月修了

古永好未

主査 天野聡一 副査 辛島美絵 宮崎裕子

研究背景

山東京伝の黄表紙作品は数多く存在する。式亭三馬作『其跡幕婆道成寺』が京伝作『箱入娘面屋人魚』の影響を受けた作品であることを受け、京伝の黄表紙作品を三馬がどのように典拠利用したのかについて注目した。また、『箱入娘面屋人魚』は「浦島太郎」の後日譚であることから、同じ「昔話物黄表紙」という共通点を有する京伝作『桃太郎発端話説』の注釈を行った。

寛政元(1789)年の過料、その2年後の手鎖という処罰後の京伝作品の多くが研究対象とされていない。本研究では処罰後の京伝作品を多く取り上げるため、京伝研究において意義のあるものだと考える。

研究目的

【論文編】では、京伝作品を三馬がどのように典拠利用したのかについて分析することにより、京伝の黄表紙作品が他の作者に与えた影響の大きさを示すことを試みた。【資料編】では、京伝作『桃太郎発端話説』の注釈を行うことで作品読解に役立てることを試みた。

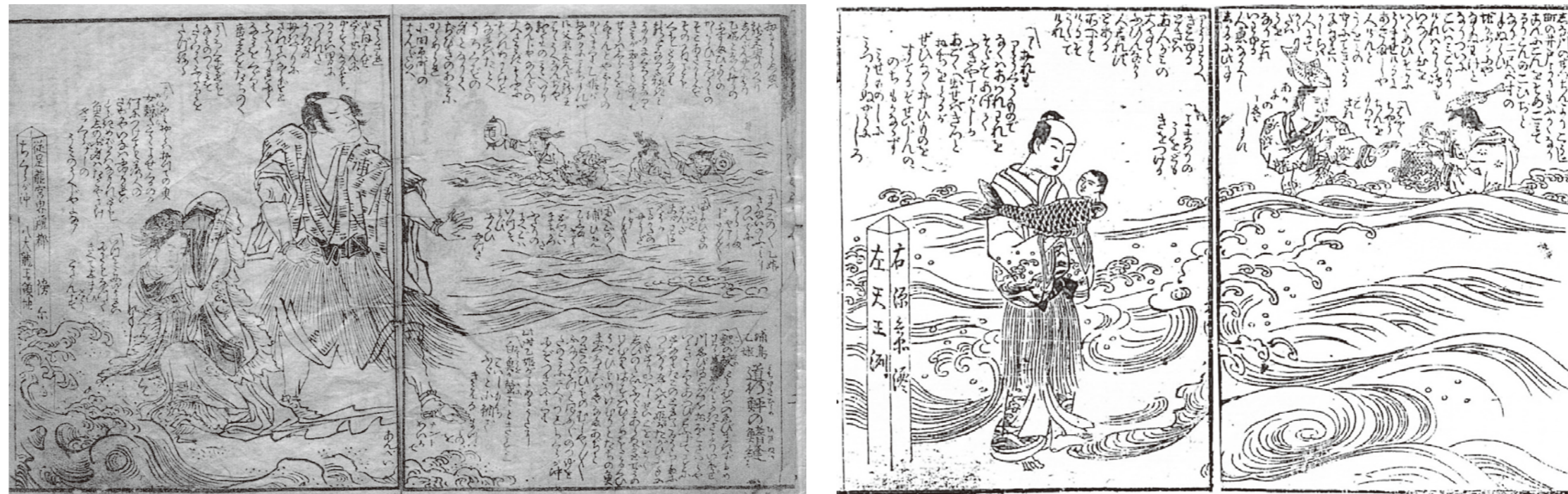
本研究では【論文編】で取り上げる多くの作品、【資料編】の『桃太郎発端話説』が処罰後の京伝作品である。これまで研究対象とされることの少なかった作品を取り上げることによって、京伝の黄表紙研究に役立てることが大きな目的である。

研究概要

【論文編】では、三馬による京伝作品の典拠利用の仕方を概要、表現、挿絵の構図などの面から比較した。例えば、下図は右が京伝作『箱入娘面屋人魚』(寛政3<1791>年刊)、左が三馬作『其跡幕婆道成寺』(寛政10<1798>年刊)の挿絵だが、両者を比較すると、①右側に大きく海が描かれ、②左側に浦島、右側に浦島にとって厄介になる者がいて、③左側に標識があるという共通点が見られる。三馬は芝全交の作品も典拠利用しているが、三馬のデビュー作は京伝・全交に比べて各場面に統一性や滑稽さがないと指摘されている。そこで作品の各丁ごとの登場人物・場面をまとめた表を作成し、デビュー作以外の作品を検討した。その結果、デビューから5年後の『侠太平記向鉢巻』(寛政11<1799>年刊)では、各場面に統一性・滑稽さが見られるようになっているという知見を得た。

【資料編】では、京伝作『桃太郎発端話説』(寛政4<1792>年刊)の本文について注釈を施した。『桃太郎発端話説』は「舌切り雀」の説話に実方朝臣の入内雀伝説を織り交ぜ、最後の丁で川から流れてきた桃を婆が拾い、「桃太郎」の冒頭に繋げて話が終わる。作中には「てんこちもない」「嫌味辛味」といった江戸語や洒落を用いた表現が多く用いられている。

そうした表現の一例について、同時代の用例を探り、その意味するところと表現効果を明らかにしていった。



成果・まとめ

【論文編】では、三馬による京伝作品の典拠利用をみることで、これまであまり論じられていなかった黄表紙における京伝から三馬への影響の大きさを確認できた。また、京伝・全交・三馬作品の各丁ごとの登場人物と場面をまとめた表を作成したことで、三馬のデビューから5年後の『侠太平記向鉢巻』では統一性・滑稽さが見られるようになっていることが分かった。

【資料編】では、京伝作『桃太郎発端話説』の注釈を行い、現代では分かりにくい言葉を解説したことによって、作品への理解を深めることが出来た。



指導教員コメント

本研究は、近世中後期に刊行された黄表紙を対象として、その代表的作者である山東京伝の作品を視座に据え、「京伝の作品が後続作にいかにか影響を与えたのか」という受容史的観点(論文編)、「京伝の作品が先行作品からいかにか影響を受けたのか」という注釈的観点(資料編)の二つのアプローチによって検討を加えたものである。

現存する黄表紙が大変な数にのぼることは、黄表紙研究の第一人者・棚橋正博の労作『黄表紙総覧』によって広く知られるところであり、たとえば京伝の黄表紙のみを取り上げて一〇〇作を超える。本論文が対象とするのは、このように非常に大きなジャンルだが、如上の方法論を採ることによって、一作品の分析にとどまらない一定の通史的見解にたどりついている。

天野聡一